

アイデンティティ概念の理論的背景と問題点について ——精神的観点による再検討のために——

大 矢 泰 士

Theoretical Background of the Concept of Identity and its Problems: An Attempt for Re-examination from Psychoanalytic Viewpoints

OYA, Yasushi

Abstract

E. H. Erikson's concept of identity is nowadays seldom referred to in psychoanalytic literature and seems to be left without stable position within psychoanalytic theory (Wallerstein 1998). The author attempted to re-examine the problems and possibilities of this concept, focusing on its relationship to the stream of phenomenological ego-psychology from Victor Tausk to Paul Federn. As a result, the author pointed out this concept's problem concerning "the relationship between ego as a function and ego as an object of consciousness", and the confusion accompanying "the overlap of multiple levels of psychological development or personality organization". The implications of phenomenological stance of Erikson and its relationship to mainstream psychoanalytic theory were also discussed.

Key words: E. H. Erikson, personal identity, ego identity, Victor Tausk, Paul Federn, phenomenological, ego-feeling, sense of self, levels of personality organization, personality disorders

キーワード：E・H・エリクソン，パーソナル・アイデンティティ，自我アイデンティティ，ヴィクトール・タウスク，パウル・フェダーン，現象学的，自我-感情，自己感，パーソナリティ組織化の水準，パーソナリティ障害

目 次

- はじめに
1. ヴィクトール・タウスクの貢献
 - 1.1 タウスクのアイデンティティ概念
 - 1.2 タウスクの背景から
 2. パウル・フェダーンの影響
 - 2.1 フェダーンについて
 - 2.2 フェダーンの自我概念
 - 2.3 フェダーンとフロイト
 - 2.4 フェダーンとエリクソン
 3. E. H. エリクソンのアイデンティティ概念について
 - 3.1 エリクソンの歴史
 - 3.2 エリクソンの臨床アプローチの特徴
 - 3.3 エリクソンのアイデンティティ概念の検討
 - 3.3.1 機能としての自我と意識の対象としての自我の関係
 - 3.3.2 発達の水準の折り重なり
- おわりに

はじめに

心理学および精神分析の用語としての「アイデンティティ」は、児童と成人の精神分析家であったE.H.エリクソンが、精神分析の考え方を個人と社会との関係を含めた観点へと拡張しようとする彼の心理-社会的観点を発展させるなかで大きく取り上げた概念である。エリクソンの発想が学際的志向性に親和的であったこともあり、この概念は精神分析や心理学の枠組みを超えて、多種多様な研究を今でも生み出している。

ただ、今日においてこの概念は、たとえば「民族」やジェンダー等の「集団アイデンティティ」にかかわる研究を数多く生み続けているのに対して、精神分析の分野においては、Kernberg (2006)らがアイデンティティ拡散を境界水準のパーソナリティ障害の基本的特徴の一つに位置づけているのを除けば、テーマとして取り上げられることが稀となっており (Wallerstein 1998)、アイデンティティとは何かという基本的な点が十分に合意されないまま置き去りにされているようにも見える。

エリクソン自身もたびたびこの概念の曖昧さを認めている。この曖昧さはこの概念の本質的な特徴を反映している可能性もあり、単純に定義が明確になればそれで良いという問題ではないように思われるが、この概念が青年期から成人期にかけての発達の研究や臨床心理的援助において現在でもキーワードの一つであり続けていることを考慮すれば、この概念の基本的な意味合いについて、その問題点と可能性を含めて再検討する必要性は高いように思われる。とくに、エリクソンのアイデンティティ論の精神分析理論における位置付けは、実際には不明確なまま放置された状態になっているという指摘もあり (Wallerstein 1998)、こういった精神分析的観点からの根本的な再検討が欠かせないと考えられる。

本稿では、このやや巨大とも言えるテーマの研究への一寄与として、精神分析的な思考の中でこのアイデンティティの概念がどのように生まれてきたのか、その淵源に焦点を当て、その角度

からこのアイデンティティ概念の特徴を浮き彫りにし、精神分析的な理論と臨床的思考におけるその利用可能性にまつわる問題点を中心として再検討することを試みたい。一般に、アイデンティティ概念はエリクソン個人がもつ社会的・民族的背景から生まれたとやや大雑把に理解されており、それは一面においては妥当と考えられるが、それだけでなく彼が精神分析の理論的思考を形成するなかで受けた影響関係もまた彼の理論の特異性に影を落としており、本稿ではこの点も含めて考察することで、精神分析理論の中での彼のアイデンティティ論の位置付けを明らかにするための一助ともしたい。

1. ヴィクトール・タウスクの貢献

精神分析の世界でアイデンティティという言葉初めて術語として使用したのは、ヴィクトール・タウスクの論文「統合失調症における『影響機械』の起源」(Tausk 1933 [1919])であるとされている (Jacobson 1964, 邦訳p. x)。エリクソンが精神分析のサークルに関与しはじめたのはタウスクの死後であり、タウスクをめぐる当時の精神分析界の状況から見ても直接の影響関係は想定しにくい。エリクソンは彼が学んだウィーン精神分析研究所のセミナーで、講師であったパウル・フェダーンが自我アイデンティティまたはそれと非常に近い表現を用いていた憶えがあると語っている (Friedman 1999, p. 79)。このフェダーンは生前のタウスクと近い関係にあって、タウスクの提唱した自我境界の概念を発展させた精神分析家であり、後述のようにアイデンティティ概念に類似する発想を展開していた。以下では、歴史的順序に沿って、まずタウスクと彼のアイデンティティ概念について見ていきたい。

1.1 タウスクのアイデンティティ概念

タウスクとフェダーンはともに、最初期に精神分析運動に参加した人々のなかでは数少ない医師であり、フロイト自身が臨床的にはあまり試みなかった精神病への精神分析的アプローチを考究したことで知られている。タウスクは上記の論文において、統合失調症の「影響機械」の妄想について、投影の概念を用いて説明し、この症状を発達早期の段階への退行と捉えた。そして彼は、早期発達に二つの段階を想定し、そのひとつは自己と対象の区別を知らない自己充足的なアイデンティティの段階、もうひとつは外界への自己の身体の投影から始まり自己認識をもつアイデンティティの段階であるとしている。そして彼は、後者の段階に至っても前者がなくなるわけではなく、本来的なナルシズムの源として働くと考えた。付言すれば、この論文で彼は影響機械の妄想を含めて幅広い次元の自己愛的問題を「自我境界の喪失」として捉え、このオリジナルな観点は後述のパウル・フェダーンに受け継がれて、以後の精神分析的自我心理学の精神病論に大きな影響を与えることになる。

アイデンティティの二つの段階に話を戻すと、前者の段階は対象が存在しない段階として記述されており、その意味ではフロイトの一次的ナルシズムや、M. マーラーが提唱してのちに否定した正常自閉段階を思わせる概念であって、今日的な観点からすれば仮想的なものにすぎないように見えるが、全体的な趣旨からすると、むしろウィニコットが想定したような自他未分化な万能的世界を指し示そうとしていたのではないかと推測することもできる。

タウスクがアイデンティティという言葉直接的に用語として用いているのは主にこの部分であり、比較的プリミティブな次元の発達に即して述べられているが、この論文の後半で彼はこの二つの段階に関連して、「人は存在していくための闘争において、彼自身を新たに見出し認識する

よう常に強いられている（英語版p. 544）」ことを理解すべきだとも書いている。この記述からも明らかなように、彼のこの概念は（社会との関わりの側面も含めて）健康な成人も体験するような普遍的なものとして思い懐かれており、ごく萌芽的な記述ではあるが既にエリクソンの概念と通底するものがある。

ある個人の考えとその人の個人史とを安易に結びつけるのは危険でもありうるが、タウスクのアイデンティティ概念は、彼自身の個人史にみられる事柄と大きく重なる側面があると思われるため、ここで彼の背景に簡単に触れておきたい。

1.2 タウスクの背景から

ヴィクトール・タウスクは、初期のフロイトの弟子のなかでは最も才能に溢れた人物と目されていたが、精神的に不安定な要素を抱えていたことも知られている。彼は1879年にスロヴァキアで生まれ、クロアチアで育った。ジグムント・フロイトよりも23歳年下である。タウスクに関する伝記的著作を記したローゼン（Roazen 1969, 1975）によれば、ジャーナリストだったタウスクの父親は魅力的な人だったが、性的に放縦で家庭では暴君的であり、母親は自己犠牲的な人であったという。タウスクは母親に対して優しく、父親に強い反感を抱いていたとされる。タウスクは医学を志していたが経済的理由から断念し、ウィーン大学で法学を学んだ。21歳で結婚してユーゴスラヴィアに戻り、弁護士助手として働く。26歳で正式の弁護士資格を得るが、同時期に結婚生活が破綻し、妻子はウィーンに去り、彼はベルリンに移って劇作家・著作家・ジャーナリストに転身してしまう。しかし経済的な貧窮が続き、心身の疲労により2年後には体調を崩してライン地方の保養所に自発的に約三週間入院した。ベルリンに戻った後、彼はフロイトの著作への感想を著者フロイトに送り、これを読んでタウスクが医師であると思い込んだフロイトから、精神分析を学ぶように勧める返事をもらう。彼は医師になることを決意して1908年にウィーンに移り、新聞社で働きながら医学を学んだ（同年に正式に離婚）。1914年に医学の修行を終えるが、第一次大戦が勃発して精神分析の開業が困難となる中、彼は軍務に服し、軍医として遠方に駐在することになる。多忙な生活であったがこの時期に彼は上記の「影響機械」の妄想に関する労作をはじめとする代表的な論文を発表した。彼は、この論文を含め、フロイトのサークルのなかでは初めて精神病の臨床研究に取り組み、このテーマに関する論文をいくつか発表して、当時の精神分析のサークルで代表的な論客としての評価を得た。大戦後、ウィーンに戻った彼は、フロイトに精神分析を依頼するが、フロイトは断り、代わりにタウスクよりも5歳も年下のヘレーネ・ドイチュの分析を受けるように勧める。タウスクはフロイトの勧めに従ってドイチュの分析を受けたが、その当時ドイチュ自身がフロイトの分析を受けているという入り組んだ状況にあり、彼女はフロイトから受けている分析でタウスクの話ばかりするようになった。これを妨げと感じたフロイトは、ドイチュに対して、自分との分析をやめるか、タウスクの分析をやめるかどちらかにするよと告げ、ドイチュはタウスクに事情を説明して分析を終わりにした。その約三ヶ月後、タウスクは新たに恋愛関係となった女性との結婚の準備中に自殺を遂げた。

タウスクの卓越した才能は当時の誰もが認めるものだったが、その一方、前述のローゼン（Roazen 1969）によれば、タウスクは医学の勉強を始める直前のベルリン時代の入院中に二週間程度の抑うつ状態にあり、その後も時折再発していたことが彼の手紙などから推測されているほか、妻やその他の女性との関係と同様にフロイトに対しても対人的な距離の喪失の問題を抱えており、過度に深くもたれかかってしまう傾向を示していた。タウスクと一時期恋愛関係にあったルー・アンドレアス・ザロメも、才気煥発な彼があまりにもフロイトに忠実で、フロイトに過度に同一化

していることに驚いており、タウスクが「自分を（フロイトの）息子にすること」と、「そのことゆえに父（フロイト）を憎むこと」という葛藤的な転移的状况に陥っていたと後年になって分析している（Andreas-Salome 1964, pp. 166-167; Roazen 1969）。

ローゼン（Roazen 1969）は、タウスクが精神病や芸術の精神分析的研究など、ちょうどそのときにフロイトが取り組もうとしている問題に取り組んではフロイトよりも先に発表してしまう傾向があったことを指摘し、フロイト自身がタウスクとの関係を居心地悪く感じると告白しているのは主としてこのためであると見ている。それはともかく、フロイトがドイツによるタウスクの分析を事実上中断させてしまった経緯には、今日の精神分析の治療構造や転移-逆転移のエナクトメントといった観点から見れば問題と思われる点があるが、当時はまだこのような視点が十分に成立していなかったことに加えて、当時は神経症を主な治療対象としておりパーソナリティや対象関係の問題が十分に認識されておらず、フロイトもドイツもタウスクを健康人とみなして分析の中断の影響を深刻に考えなかったであろうことなども、その背景にあると考えられる。

ローゼンによる理解の是非はともかく、その詳細な資料から浮かび上がってくるタウスクの個人史には、特定の相手に極度に依存し同一化する傾向と、そのように自分が依存したり女性から依存されたりすることに対する恐怖、父親の人物への際立った敵対と攻撃などの要素が繰り返し現れているように見え、タウスクがそういった自らの心理的問題を背景として、自他の境界や自分の自立性というテーマを強く意識していたことが推測される。このことは、彼のアイデンティティ概念が、ややプリミティブな退行的次元での自他の融合と分離を扱っていることと無関係ではないように思われる。もちろん、彼が弁護士助手、劇作家、精神分析家と大幅な転身を遂げている点は、彼の社会的自己規定に関する苦闘という側面を反映していると思われるが、この点は付加的な記述を除けば彼のアイデンティティ概念そのものに直接反映されているわけではない。簡潔に言えば、彼のアイデンティティ概念の記述は、彼が抱えていた主要な心理的問題と同様に、どちらかといえば前エディプス的な次元に重点があるように思われる。

2. パウル・フェダーンの影響

エリクソンのアイデンティティ概念が精神分析理論のなかに位置付けにくい背景として、エリクソンが一般的には自我心理学派に分類されながらも、自我心理学の主流であるアンナ・フロイトやハルトマンとは明らかに異質な基盤と発想に立っているという点が挙げられる。実際、エリクソンはアンナ・フロイトやハルトマンが自我そのものの本質を明らかにしていないと考え、ウィーン時代には二人よりも「分かりにくいが魅力的な教師」であったパウル・フェダーンに目を向けていたという（Friedman 1999）。

前述のように、エリクソンは、フェダーンが「自我アイデンティティ」あるいはそれに非常に近い表現を用いるのを耳にしたような憶えがあるとフリードマンに語っている（上掲書）。エリクソンは『青年と危機』（Erikson 1968）のまえがきでも、ウィーン精神分析研究所でフェダーンの「自我境界」に関する（やや難解な）セミナーを受講したときのエピソードを記し、エリクソン自身のアイデンティティ概念の分かりにくさとフェダーンの自我境界概念の分かりにくさを諧謔的に併置させてみせている。

もちろん、エリクソン自身が影響を受けたと述べているのはフェダーンだけでなく、自我に奉仕する退行という概念から芸術的創作を説明したエルンスト・クリスや、自我における流動性と鑑について述べたヴィルヘルム・ライヒからの影響にも彼は言及しており、またそれ以外にも多

種多様な影響関係を想定することが可能であろう。とはいえ、アイデンティティ概念の理論的側面に関していえば、後述するように、フェダーンのやや独特とも言える現象学的な自我概念や、とくに自我感情 (Ich-Gefühl) の概念が、エリクソンのアイデンティティ概念に直結する要素を数多く持っているため、以下では、フェダーンのこれらの概念について検討し、そこからエリクソンの概念を検討するための補助的な視点を得ることを試みたい。

2.1 フェダーンについて

パウル・フェダーンは1871年ウィーン生まれの内科医・精神科医で、フロイトの最古参の弟子の一人であり、1938年のフロイトの英国亡命後は米国に移り、1950年に亡くなっている。彼は自我を考究して自我心理学の祖とされるほか、精神分析の発展の早期から精神病患者への精神分析的アプローチを試み、統合失調症等においては自我への備給が過剰なのではなく不足していると指摘して、自我を強化する方向をもった精神病への治療アプローチを提唱し、戦後の米国の力動精神医学に大きな影響を与えたことで知られる (cf. 小此木 2002)。

エリクソンがウィーンでの精神分析研究所でフェダーンに教えを受けたのは1930年前後の時期であるが、これはフェダーンが自我を考究して自我境界や自我感情に関する論文を数多く発表した直後の時期にあたり、前述のようにエリクソンの「青年と危機」の序文にも、彼がウィーンでフェダーンによる自我境界に関するセミナーを受けた時のエピソードが記されている。以下では、エリクソンが直接触れた時期のフェダーンの自我論の特徴を簡単にまとめてみたい。

終生フェダーンはフロイトへの忠実さで知られ、彼自身とフロイトとの見解の相違を容易には認めようとしなかったと伝えられるが (Weiss 1953)、1920年代の彼の論文にみられる自我の概念は、後期フロイトやそれ以後の自我概念とやや異なるものである。フェダーンの自我概念は、フロイトと一定の距離を置き続けたP.F.シルダーの「身体像」・「身体図式」といった概念の影響や、哲学者フッサールの現象学の影響を受けて、体験に即した現象学的なものとなっている。

フロイトは1923年の「自我とエス」で、自我について機能としての側面を論じ、アンナ・フロイトらもその方向性を受け継いでいるのに対して、フェダーンは自我を「体験」として捉えた。彼はタウスクの自我境界の考え方をさらに展開させ、健康者から離人症そして精神病にいたる幅広い状態を例に引きながら、自我境界へのリビドー備給の欠乏が現実感覚の低下をもたらすとした。また、彼は自我や自我境界に関連して、個人にとっての自分自身という感覚を表すために Ich-Gefühl (一般に「自我感情 ego-feeling」と訳される) という言葉を用いた。また彼は、健康な自己愛という観点に初めて本格的に言及した分析家としても知られる。

フェダーンの業績の全体像については小此木 (1985b) を参照されたいが、以下のような点が、フェダーンの考えのなかでもエリクソンのアイデンティティ概念に直結しているように思われる。

フェダーンは、体験としての自我や、自我境界、自我感情といった概念について、その特徴として全体性、統一性、連続性、一貫性を繰り返し強調している。一例を挙げれば、彼はある箇所です、「自我『境界』という用語は…自我感情がひとつの全体性であることを暗示していなければならない。それによって、自我感情を構成するリビドー備給も同様に、中心的には一貫していなければならない」 (Federn 1953, p.286) と述べている。この自我感情 (Ich-Gefühl) は、フロイトがあまり用いなかった言葉であるが、実質的には現代でいう自己感 (sense of self) に近く、フェダーンはこれを自己愛的備給が主観的に体験される仕方として説明している。近年になってこの言葉の臨床的な有用性に再注目したBonomi (2010) は、この自我感情 (Ich-Gefühl) を英語では“the feeling of myself”と訳すことを提案しており、これも自己感にかなり近いものを指していると思わ

れる。

また、フェダーンは機能としての自我と、体験としての自我との関係について述べた中で、自我が主体にもなれば客体にもなるという点が、自我を他のあらゆる存在から区別する特徴であるとしている。彼は自我を客体として捉えた場合に「自己」という言葉も併用してはいるが、彼がこれらの論文を発表した1920年代には、精神分析理論に今日のような「自己」の概念は十分に確立しておらず、結局、彼の理論全体の中では客体の側面も自我として扱われている。

また、彼は、自我が自己愛の主体でもあれば対象でもあるという点に関連して、タウスクにも似た形で自他未分化な一次的自己愛から二次的自己愛への進展を論じ、古典ギリシャ語文法の用語である「中間態」(能動態と受動態の中間にあたるもの)と西洋語の「再帰動詞」(主体自身を '~oneself' といった形で目的語として明示するもの)の対比を用いて、「一次的自己愛は『中間態』の特徴をもち、もっと後に、自我がそれ自身と数多くの関係性のなかで出会った後になって初めて『再帰的』な形をとるようになる」(Federn 1953, p. 312)と述べている。しかしこれも、主体としての自我と客体としての自我を素朴に同じものにとらえる見方から一步も出てはいない。

タウスクからフェダーンにいたる初期の自我理論の流れを「現象-力動論的自我心理学」と呼んで他の自我心理学と区別した小此木(1985a, b)は、彼らの自我理論がこのように現象学的なものになった背景として、前述のシルダーやフッサールの影響に加えて、フェダーンやタウスクが新たに精神病の症状を精神分析的に説明しようと試みるなかで、その主観的に体験される症状を対象とすることとなり、そのため必然的に現象学的な説明の仕方となったと見ている。

フェダーンらの自我概念は、後年の自我概念のように防衛や性格といった観点を中心とした力動的なものとはやや異質なものであるが、欲動あるいはリビドーの備給といった観点から説明されている点で当時のフロイトに忠実であり、師フロイトの考えを精神病の説明に応用しようとした試みであった。また、精神分析理論における初期の自我概念は、まだ明確に定義されずに多種多様な側面から説明されており、そのような中から生まれてきたものである。

2.2 フェダーンの自我概念

フェダーンの自我概念は、彼の中でその後、脆弱な自我の強化を含む精神病への精神分析的アプローチへと発展し、これが米国の精神力動的精神医学に大きな影響を与えたことは前述のとおりである。しかし、彼の自我概念そのものは、その後の自我心理学のメインストリームに直接的に受け継がれているとは言えない。部分的には、たとえば彼の自我境界の概念がロールシャッハテストを用いた研究に応用されて精神病的な自我の特徴を浮き彫りにするうえで重要な役割を果たしたことや、あるいは、健康な自己愛を想定しつつ、自己愛状態を自己愛の過剰ではなく欠乏から説明したという点はその後のコフォートの基本理論と大いに重なることを挙げることはできるが、彼の自我概念そのものがあまり精神分析理論の中で直接継承されていないのはなぜであろうか。

体験としての自我(あるいは自我感情)という概念や、主体でもあり客体でもある自我という発想など、彼の現象学的な自我の概念化は、本来の精神分析の本質的特徴である無意識の措定という観点から見れば、自我が自分自身を、何の苦もなくありのままに捉えることができるかのような印象を与えるという意味で、やや素朴で楽観的な見方のように見える。精神病の主観的症狀への着目が背景にあることや、リビドー論的な説明が中心で防衛などの観点はあまり含まれていないことなどもあって、神経症的な防衛による歪曲などはあまり考慮されていない。

1920年代にフェダーンが体験としての自我を言い表す際に盛んに用いていた用語の一つである、

前述の「自我感情」の概念に関連して、フロイトは1930年の論文「文化の中の居心地悪さ」のなかで、このように述べている（岩波版p.69）。

通常、われわれにとって、自分の自己の感情、われわれ自身の自我の感情（das Gefühl unseres eigenen Ichs）ほど確かなものはない。われわれには、この自我は自立的、統一的で、他のすべてのものから鮮やかに際立っていると映る。一見もっともらしく思えるのだが、これが誤りであること、…（中略）…、自我はこのエスを飾るいわばうわべの装いにすぎないこと、これは精神分析的な研究が初めて説いたところである。

フロイトはこの少し後の部分の脚注で、自我感情（Ichgefühl）等についてはフェダーンらの研究を参照するようにとも記しており、決して自我感情の研究を全面的に否定していたわけではないが、精神分析的観点を特徴づけている無意識の措定という前提からすれば、このような自我の体験としての自我感情を、不確かな仮象にすぎないとして切り捨てるフロイトのこのような捉え方はごく必然的な帰結とも言える。

ただ、このような、機能の主体としての自我と客体としての自我との素朴な同一視とも呼べるものは、フロイト自身の自我概念の変遷と無関係というわけではない。ストレイチーが英訳標準版フロイト全集（Standard Edition）の「自我とエス」の訳注で指摘しているように（Strachey 1961, 邦訳p. 369）、フロイトの「自我」という言葉の用法には揺らぎがあり、フロイト初期の1895年「科学的心理学草稿」や、この1923年の「自我とエス」では機能としての自我が論じられているのに対して、その二つに挟まれた時期での自己愛に関する記述では、自我という用語をむしろ「自己」に相当する意味で用いている。

フロイトやフェダーンが依拠していたリビドー論的な文脈で自己愛を論じようとした場合、機能する自我へのエネルギー備給などの観点が入ってくることからも、自己愛が向けられる対象として自我の概念を含める必要があったものと考えられ、リビドー論がはらむ混乱がこの概念化に反映されているとも考えられる。フェダーンの自我概念は、フロイトが用いた自我概念の揺らぎのなかの、この「自己」に相当する意味での自我概念を包含していることになる。

いずれにせよ、自我がみずからをそのままに認識することは一般的に可能でなくその統一性も仮象に過ぎないという、無意識仮説を前提とした精神分析のペシミスティックともいえる視点からすれば、フェダーンの自我感情の概念を何か確固としたものであるかのように考えることは困難になると考えられる。

とはいえ、主観的体験に沿うフェダーンの現象学的な自我概念は、すぐれた臨床家としての彼の特徴と結びついている側面もある。精神病的な体験を基盤にしたことが現象学的な自我概念に結びついたという小此木の説明については前述の通りであるが、それに加えて、フェダーンの精神病治療論は陽性転移の確立と維持を重視しており、患者の思考を肯定し、人格を尊重する共感的アプローチがとられるのが特徴である。体験に沿う現象学的な自己概念は、このような彼のアプローチの特徴と表裏一体でもあったと考えられる。そして、この彼の特徴は後述のようなエリクソンの臨床アプローチの特徴とも主要な側面において重なっている。

2.3 フェダーンとフロイト

前述のようにフェダーンはフロイトの最古参の弟子の一人であり、フロイトの癌が発覚してからはフロイトに分析を求めてくる患者たちを任されたり、フロイトの役割の代行に任せられるな

ど、臨床面や運営面に関して言えば、ある程度フロイトの信頼を得ていたと言える。フェダーンは臨床家としてはフロイト以上に人間味と思いやりにあふれた人物であったといい、精神分析に限らずその患者に適した技法を柔軟に用いていた。当時のウィーン大学医学部教授でフロイトと微妙な関係にあったヴァグナー-ヤウレックも、臨床家としてのフェダーンを信頼して患者を回してきていた (cf. Roazen 1975, Weiss 1966)。

その反面、フロイトの直接の弟子たちについて詳しい資料を提示しているローゼン (Roazen 1969, 1975) によれば、フロイトは自分のもとに残った最初期の弟子たちを学問的にあまり評価しておらず、フェダーンの理論化についても、分かりにくく不明瞭なものと考えており、その価値も認めていなかった。ヘレーネ・ドイチュがローゼンに語ったところによれば、フェダーンの研究発表中にフロイトが彼女にジョークを書いたメモを回してきて、そこには「何を話しているか分かるかね？私には分からん」と書かれていたという (Roazen 1975)。

フェダーンに好意的な多くの分析家たちも、フェダーンの自我に関する論文の書き方の不明瞭さや彼の自我境界概念の分かりにくさを認めている (ex. Erikson 1968, Weiss 1953, 1966)。彼は混乱しやすいことや言い間違いの多いことでも知られており (Roazen 1975, Erikson 1968)、自分でも言い間違いの多さを自覚して冗談の種にしていたという。彼の弟子の一人で、彼の著作集の編者でもあるワイス (Weiss 1966) は、博愛的で人の良いフェダーンが他人に騙されやすかったことを記し、また、フロイトのような現実主義や自己懐疑が彼には欠けていたとまで述べている。

2.4 フェダーンとエリクソン

前述のように、フェダーンは自我あるいは自我感情、自我境界、自我経験などについて述べた際に、いずれにおいても全体性、統一性、連続性、一貫性を本質的特徴として繰り返し強調していた。また、彼はアンナ・フロイトらとは異なり、自我についてリビドー論の文脈で説明する傾向が強かった。フェダーンがどの程度、(タウスクが用い始めた) アイデンティティという言葉を用いていたかは明らかでないにせよ、こういった彼の自我論の特徴が、エリクソンの述べるアイデンティティ概念に非常に色濃く反映されていることは明らかであり、エリクソンはそれに独自の心理-社会的観点を付け加えることによって彼の概念を作り上げたとも言えるだろう。

もしそうだとするなら、なぜエリクソンは、フェダーンを十分に引用してその影響関係をもっと明らかに示そうとしなかったのであろうか。前述のワイスによると、フェダーンは、彼のセミナーに出席していた何人かの精神分析家たちが1930年以降に自我心理学の論文や著作を発表したさい、彼に言及しなかったことに深い失望を味わっていた。しかし、フェダーン自身も認めていたように、フェダーンが彼の発表したもののなかで自分の発見を明快に述べることができていなかったのは事実であって、その理由の一端は、彼がフロイトへの絶対的な忠実さゆえに、自分の独自の見解を常にフロイトの概念を裏付ける方向に結びつけようとしたためであると考えられる (Weiss 1966, p. 153)。

実際、フェダーンが自我について書いた諸論文を読むと、その趣旨を明快にまとめたり、その考えを簡潔に凝縮した部分を見つけたりすることが容易でないことが分かる。弟子であったワイス自身でさえ、フェダーンの記述を読んだだけでは必ずしも理解できるとは言えず、フェダーンと長々とやりとりしてようやく分かるのが常だったと述べている (上掲書)。エリクソンがフェダーンのセミナーから多くの発想を得たとしても、どこからどこまでがフェダーンの発想なのかを明確に引用して示すのは難しかったと推測される。おそらくエリクソンは、彼自身もよく分からないその影響関係を、1968年の『アイデンティティ：青年と危機』のまえがきの冒頭において、

以下のようなフェダーンのセミナーをめぐる笑い話（愛情をこめた揶揄のようにも見える）を通して、漠然と示すことしかできなかったように思われる。

[自我境界についての連続セミナーの最終回の終わりに、フェダーンは]手にした原稿をたたみながら、ようやく理解してもらったことができた人の雰囲気を漂わせて、こう尋ねた。「さて、私はよく理解しているかな？」(Erikson 1968, 邦訳p.9)【注：原語の言い回しに即して説明すれば、「私は私自身をよく理解してもらえただろうか？」と言おうとして、言い間違えて「私は私自身をよく理解しているだろうか？ (“Habe Ich mich verstanden?)”）」と言ってしまったという錯誤行為の笑い話である。なお、1969年の邦訳版ではこの言い間違いが正確に訳されていないため、ここでは新たに訳し直した。】

このあとにエリクソンは、自分はアイデンティティについての自らの論文を読む際にこの「自分は理解しているだろうか」という問いを繰り返してきた、と続けて、アイデンティティ概念の定義的説明の困難さを述べており、その意味では彼はフェダーンと自分自身を重ねた書き方をしている。ただ、エリクソンが、アイデンティティ概念について述べるなかで、この概念に学問的論文で言及したことがないフロイトを大幅に引用しているのに対して（「ブナイ・ブリース協会会員への挨拶」Freud 1926）、彼自身のアイデンティティ論と共通点の多いフェダーンにはわずかしか言及していないのは、ややバランスを欠いているのも事実である。もちろん、前述のようなフェダーンの自我論の分かりにくさという背景や、当時、米国内で精神分析理論からの逸脱を批判されていたエリクソンにとってはフロイトの思考との連続性を強調することが必要だったという理由もあるかもしれない。しかし、この扱いの違いには、遠く離れたよく知らない父親を理想化してそこに同一化し、目前の優しい養父にはやや脱価値化したような見方をするという（図式化のためにやや誇張した表現ではあるが）、エリクソンのパターンが繰り返されているようにも見える（cf. Friedman 1999）。

3. E. H. エリクソンのアイデンティティ概念について

エリクソンのアイデンティティ概念が、彼の歩んできた人生と深く結びついたものであるという盛んに繰り返されてきた説明は、大筋において妥当とは考えられるものの、そこでいう彼の人生とは主としてエリクソン自身が回想したナラティブにもとづくものであった。エリクソンが亡くなって5年後の1999年に発表されたフリードマンによる伝記（Friedman 1999）は、エリクソンが生涯知ることのなかった彼の父親に関する情報や、家族背景、青年期の彼についての詳しい客観的情報など、彼の人生について再構成するうえで重要な情報を多く含んでいる。以下では、これによって付け加えられた情報も含めて、エリクソンがアイデンティティ概念を提唱するまでの彼の背景についてかいつまんで述べてみたい。

3.1 エリクソンの歴史

エリクソンの母親カーラは、デンマークの首都コペンハーゲンのユダヤ人の名門アブラハムセン一家の出身である。この一家はもともと商人が多かったが、知的な気風をもち、家系図にはコペンハーゲンの主任ラビ（ユダヤ教の聖職者）のほか、ルター派の牧師の記載もあるという。一家は食事などでもユダヤ教の伝統に必ずしもとらわれない面があった。カーラは一家の中でも知

的な女性で、高等教育を受け、キリスト教的な哲学者キルケゴールの著作を愛読していた。

カーラは最初、一族の知人の息子で株式仲買人のサロモンセンと結婚したが、すぐにこの新郎は秘密にしていた金銭問題ゆえに新婚旅行先のローマから一人で失踪し、のちに彼の死亡が確認されるまで音信不通のままとなった。

その4年後、カーラは、コペンハーゲンを離れてヴァカンスで滞在していたドイツで、エリク（エリクソン）を妊娠していることに初めて気付き、このときはもう出産の二ヶ月前であったという。カーラはエリクの実父が誰であるかを決して明かさなかった。エリク自身は、子供時代に親戚の会話を食卓の下でもれ聞いたのをとに、自分の父親はデンマーク人の貴族で芸術家であったと考えていたが、彼自身これを半ばひとつの空想と見なしてもいた。

上記のフリードマンもエリクの実父が誰であったかについては確証がないとしながらも、カーラに近いアブラハムセン一家の人々の間では、エリクの父親はコペンハーゲン裁判所の法廷写真家でエリクという名前だったと伝えられているといい、フリードマンはこの条件に反しない人物としてエリク・バーンセンという写真家の名前を挙げている。のちにエリクは米国に移住した後、自分の名字を、エリク自身の息子という意味で「エリクの息子＝エリクソン」としたが、彼の父の名もエリクであったとすれば、偶然とはいえこの名字もあながち根拠のないものとは言えないことになる。

ともあれ、一族の人々は不名誉を避けるためカーラに対してドイツに住む独身の伯母たちのもとにとどまるようにすすめ、彼女はフランクフルトでエリクを出産する。カーラは結婚後の苗字を使い続けており、出生証明書のうえではエリクは（4年前から行方不明のままの）サロモンセンとの間の息子として登録された。その4ヶ月後、カーラのもとに、サロモンセンが死亡したという知らせが届いたという。

その後の2年あまり、カーラはフランクフルト近郊のビュールという町でエリクを育てた。当地でのカーラは芸術家たちのサークルと交流があり、その一人からの紹介で、胃腸の弱かったエリクをカールスルーエの小児科医ホーンブルガーに診せた。適切な診断と処方によってエリクはみるみる健康になり、これがきっかけとなって、エリクの3歳の誕生日にカーラはこのホーンブルガーと再婚した。この人は優しく誠実な人物だったが、のちにエリクソンは、それまで深い相互信頼のもとに母と二人でくらししてきたと感じていた彼にとって、ホーンブルガーが闖入者としか感じられなかったことを述懐している。夫婦はエリクにホーンブルガーが実の父親だと教えることにしたが、エリクにはそれを信じることはできなかった。この欺きについて、のちのエリクソン自身は、彼を守るための愛情から出た欺きであると考えたり、あるいはもっと利己的な動機から出たものと見なしたり、どう捉えるか揺れていた（上掲書・邦訳pp. 8-9）。

また、養父ホーンブルガーはリベラルではあったが熱心なユダヤ教徒であり、カールスルーエのユダヤ教コミュニティの中心人物として活動し、カーラもその手伝いにエネルギーを注いだ。ホーンブルガーとカーラのあいだには全部で三人の女の子が生まれたが、そのうち最初の子は早くに亡くなり、エリクは二人の異父妹とともに育った。

この両親夫婦と違って（実父から受け継いだ）金髪で青い目という明らかに非ユダヤ的な外見をもっていたエリクは、ユダヤ教会では「異邦人（Goy）」と呼ばれ、逆に地元の学校ではユダヤ人と呼ばれていたと回想している（Wallerstein 2014）。また彼は、当時のドイツの子どもたちの外国人蔑視の気風の中で（特に敵視されていた）デンマーク系の出自を隠す必要も感じており、そのために少年時代の彼自身もドイツ国粋主義的な考え方に走っていた。

彼はしだいに、儀礼的なユダヤ教よりも、キリスト教のプロテスタントの純粋な敬神と信仰に

魅力を感じるようになったという。これには母親カーラの影響もあって、母親は内面ではキリスト教的精神に親しみつつユダヤ教徒としての伝統にも誇りを抱いており、これらの境界を越えることができるとエリクに教えた (Friedman 1999 邦訳p. 19)。また、彼は自分の実父はキリスト教徒のデンマーク人だったと推測するようになっていった。

彼は徹底的に暗記中心だった当時のドイツの学校の教科には関心が持てなかったといい、母カーラが彼に学業の必要性を説いて毎日勉強をみてやっていたにもかかわらず、成績は冴えなかった。最終学年のころ、同級生でのちに精神分析家となるピーター・ブロスと親友になった。ブロスとは哲学や芸術への興味や自然への親近感などを共有できたほか、母親がユダヤ人で父親がキリスト教徒だったブロスには、エリクのユダヤ教中心の家庭への不満がよく理解できたという。

ギムナジウムを卒業すると、彼は数ヶ月の徒歩旅行のあと、地元の芸術学校に入学する。これと並行して師事した美術指導者グスタフ・ヴォルフはその小冊子に若きエリクの作品を大きく取り上げており、エリクもヴォルフの「その人の本質になることや、自己を社会に結びつける重要性」を強調する教育思想に影響を受けたと推測される (上掲書p. 24)。エリクはこの小冊子を終生大切にしていたという。

その翌年から二年間にわたって、彼はミュンヘンの芸術アカデミーで学んだが、そのあいだに彼は自分には色彩を操ることができないという限界に直面し、芸術家は自分の職業ではないと悟るにいたった。その後、ミュンヘンから南下してイタリアに行き、親友ピーター・ブロスらと合流してフィレンツェ郊外で共同生活を始めたが、このフィレンツェ時代の後半にはもう絵を描くこともやめてしまい、1925年に深い挫折感を抱えたままカールスルーエの両親の家に戻った。ここでの無気力な数ヶ月間は、エリクにとって非常に辛い時期であったようである。

この少し前の1923年から約1年にわたって彼が書き連ねた手記が、彼の妻ジョーンらによって保存されており、フリードマン (上掲書) がその一部を紹介している。内容は断片的で、学問的・論理的な書き方はされていないが、のちの彼の考えにつながる萌芽をそこに見ることもできる。たとえば彼は、有形のものの有限性と、スピリチュアルなものの永続性を対比した詩句の中で、「Personは死に、Ichは生きる」と書いている。この時点で彼は精神分析の考えにまだ影響を受けていないことから、Ich (私) は精神分析用語としての「自我」ではなく、人間の主体のことを指していると思われるが、この主体を重視する姿勢は彼のアイデンティティ論のひとつの特徴とも重なる。また、「個は……より包含的であるほど、より真となる」という価値観は、直接的には人間の個人について書かれてはいるものの、彼のアイデンティティ概念や心理社会的発達図式が著しく包含的であるという際立った特徴を考えれば、まさしく彼の考え方の特徴を表しているように思われる。

彼の生涯に戻ると、彼の何ヶ月にも及ぶ無気力な状態を心配していた親友ブロスは、当時ウィーン大学に通いながら、フロイトの被分析者だった富裕な米国人ドロシー・バーリングガムの子供たちの家庭教師をしており、バーリングガムやアンナ・フロイトから小さな学校の設立を打診されたとき、才能豊かな友人エリクと一緒に出来ると返事し、1927年の早春にエリクをウィーンに呼び寄せた。

エリクの子どもたちの気持ちに対する理解力の鋭さと細やかな関係づくりの能力はアンナ・フロイトに強い印象を与え、その後、彼女は彼に対して安価で精神分析を行う提案をした。

彼はこの学校の教師として初めての仕事を、そこで天分を大いに発揮した。彼は分析中にアンナ・フロイトから児童分析家になることを勧められたとき、精神分析はあまりにも知的で言語的であり、視覚的な天分の自分には合わないと言ったが、のちの彼自身の説明によれば、アンナ

が父フロイトにそれについて相談したところジグムント・フロイトがそういう人は「子どもたちを見ることを教えることができる」と答えたことと伝え聞き、児童分析家になることを決意したという (Friedman 1999)。エリクソンは、ジグムント・フロイトが芸術的天分を精神分析に統合していると感じており、そこに自分が同一化できる人物を見出すようになった。

彼は、この学校に加わった同僚でウィーンに舞踏教授法の研究に来ていたカナダ人女性ジョーン・サーソンと出会って親しくなり、数ヶ月後にジョーンは妊娠に気づいた。当初エリクは結婚に尻込みしたが、彼の実父と同じ過ちを繰り返してはならない等という友人たちの強い説得で結婚を決意した。ジョーンは熱心なキリスト教徒であったが、エリクの両親の手前、二人はキリスト教式の結婚式のほかにユダヤ教式の結婚式も行った。

当時の学校でのエリクの人となりについて生徒たちが回想するところによれば、エリクは「神経質で内気だったが、独特のひょうきんさもあった」(上掲書 p. 43) といい、何でもないことですぐに赤面し、服装にひどく気を使っていて、鏡の前を通る時は必ず自分の姿を確認せずにいられない人だったが、子どもたちが何に関心を持っているかを直感的にわかってくれたという。

アンナ・フロイトとの分析を振り返って、エリクは、母と二人きりの幼児時代を再体験したと語っている。一方、実父をめぐる苦悩について彼は分析で話したが、(第一次大戦で父親を亡くした子どもたちとの経験が豊富だった) アンナは、彼の父親をめぐるファンタジーに批判的で、彼が自分自身の父親になるしかないと答え、エリクは理解されていないと感じたという。とくにジョーンとの結婚後は、次第にアンナとのあいだに距離が開いていったとされる。

これは筆者の推測であるが、彼の父親をめぐるファンタジーは自己愛的な防衛として機能するようになっていた側面があり (それは何ら特殊なことではなくしばしば起こりうることである)、アンナ・フロイトはそこに反応して、エリクが内的空想の問題を外的問題のせいにしてるように感じた可能性が高いと思われる。ただ、分析の内容についての被分析者の回想をそのまま事実と決めることはできないにせよ、もしそのやりとりが事実とすれば、精神分析ではそのような説得よりも防衛の分析をするほうが本来的であるとも言える。また、当時の精神分析ではまだ治療構造に関する洞察が未発達であり、アンナ・フロイトがエリクソンの働く学校の存続の可否に決定権をもつような立場にあるなど、過度に濃厚に絡み合った現実的關係からみて、十分な分析が行える治療構造があったとは言いがたい。

エリクソンは分析の終了後もアンナ・フロイトに感謝の念を表明し続けるが、アンナ・フロイトは次第にエリクソンに対して批判的になっていく。

エリクソンは児童の分析にすぐれた才能を発揮し、かなりのスピードで児童分析家・成人の分析家としての資格を得るにいたった。一方、彼が当時発表した初期の論文では、子どもと分析家との特別な関係そのものの意義を著しく強調するなど、どちらかといえば後年の関係学派を思わせるような発想もみられ、これは当時のウィーンの分析家たちからは精神分析的でないと批判的に受け止められた。

彼は分析家としての資格を得た1933年に、ナチスの脅威をいち早く認識して、妻子とともにウィーンを去る。最初、彼は、自分が本来はそこに属しているという思いを抱いていたデンマークに定住して分析家として開業するつもりであったが、当地の母方の親戚やユダヤ人社会の弁護士の奔走もむなしく、デンマーク市民権は認められなかった。彼は失望するが、妻ジョーンの意見もあって、妻の親戚が多く住み、児童分析家も求められているという米国に向かうこととなる。

到着後、ニューヨークの精神分析研究所では冷たいあしらいを受けて先行きの不安な数週間を過ごす。ボストンに移って、彼にアメリカ行きを勧めたハンス・ザックスに会い、英語は満足

に話せないながらも、当地の精神分析家たちと交流しつつ、児童と成人の精神分析を行うようになった。ほどなく、ボストン精神分析協会の会員の妹で、かつてオットー・ランクの分析を受けたが改善しなかったという若いマーサ・テイラーの治療に成功したことや、分析協会での発表などをきっかけに、彼は精神分析家・児童分析家としての実力を周囲から高く評価され、数多くの仕事を任されるようになっていった。その一方で、ウィーンで分析家となり精神分析を人文学ととらえている彼は、米国では精神分析が完全に医学の一部に位置づけられていることに、強い違和感をもっていた。

彼は精神分析的な臨床活動を続けながら、TAT（絵画統覚検査）の創始者として知られるヘンリー・マレーのいるハーバード大学の心理クリニックをはじめとして、さまざまな大学や研究所で研究活動に加わるようになった。しかし心理検査や統計的手法をもちいた研究が主流であった米国の心理学の世界で、検査にも統計にも縁のない彼は自分を異質な存在と感じていた。イェール大学に移り、人間関係研究所で研究を続けた彼は、のちの彼の心理社会的発達図式の部分的な原型となるものを含む論文を発表しているが、全体として彼の研究は米国の心理学の世界では客観性に欠けると見なされがちであり、心理学の研究プロジェクトのなかに適切な位置を見出すのも難しかった。

一方、彼はこの人間関係研究所で、文化人類学者のエドワード・サピアに出会って強い印象を受ける。サピアは個々人の人生に焦点を当てるアプローチに高い価値を置き、また学際的な志向性を強く持っており、エリクソンは文化人類学と精神分析を結びつけることを考えるようになった。1937年には、精神分析の訓練経験もある文化人類学者のスカダー・メキールと友人になり、サウスダコタ州のスー族の特別研究に誘われたことは彼にとって『幼児期と社会』につながる大きな経験となった。

1939年、カリフォルニア大学バークレー校に移り、児童福祉研究所の研究員として健康児の遊びの研究をする傍ら、文化人類学者たちとのフィールドワークにも参加する。1942年にはサンフランシスコ精神分析研究所で、非医師としては例外的に正規の訓練分析家に指名される。

彼は、知的な刺激に満ちている大学という環境を好んだが、全体として、正規の研究プロジェクトのチームにはあまり溶け込めず（前述のような当時の米国の心理学の風潮が彼の目指すところに合わなかったこともあろうが）、チームのなかで彼はあまり評価されない傾向があった。また、精神分析研究所や他の亡命ユダヤ人分析家たちにもじっくりこないものを感じており、周囲の分析家からも彼のアプローチが批判されるようになった。その一方で、文化人類学者の友人たちとの結びつきでのフィールドワークには生き生きと参加しており、自由な気風のあるメンガー・クリニックでの時折の活動も含め、彼は少数の親しい友人と深くつきあってお互いに刺激を与え合う関係をつくることができた。

さまざまな外的事情はあるにせよ、彼には全体として、正規の集団のなかでは居心地悪く感じるのに対して、一対一の関係では深く濃厚な関係をつくる、という傾向が繰り返し見られる。このことは、二者関係では深く関われるが、三者関係は必ずしも得意でないようなパーソナリティを想起させる。また、フリードマン（上掲書）は、エリクソンがアンナ・フロイトや妻ジョーンなどのように強くて知的な女性に依存するというパターンを繰り返していることを指摘しており、そこには母親との関係性が反復されている側面があることが推測される。全体的な情報を総合すると、機能は高いがやや「薄皮の自己愛」的なパーソナリティ（Rosenfeld 1987）が想定される。これが、成長期に社会的な承認を得ることが困難だった彼の特殊な家族のおよび民族的背景と関連している可能性は想像に難くないが、そこにもっと内的な要因がどれくらい関わっているのか

は、さらに慎重な検討を必要とするところである。

3.2 エリクソンの臨床アプローチの特徴

一方、エリクソンの臨床アプローチの特徴としては、著書に記された事例との関わり (ex. Erikson 1950) やフリードマン (上掲書) が記している様々な事例の経過などから、当時の米国の他の精神分析家たちとくらべた場合、①子どもをとりまく家族や社会という外的要因の重視、②本人の視点に立った共感的なアプローチ、③治療関係そのものに価値を置いていること、④治療構造が厳格でないこと、などの点を挙げるができるだろう。

最初の二つの点は、その後の精神分析の一つの方向性を先取りしているとも言える。最初の点に関して言えば、当時の精神分析では、現在ほど環境要因が重視されずに精神-内的 (intrapsychic) 要因で説明しようとする傾向が強かったことを考えると、家庭や社会の要因を重視したことは適切なアセスメントと対応に大きく資する部分があったと考えられる。その一方で、青年時代のエリクソンには内面を見つめることができないところがあった (Friedman 1999) という指摘もあり、場合によっては内的要因を否認して外的要因のせいにしてしまう危険にもつながる側面は否定しきれないであろうし、これは彼を批判した周囲の分析家たちの抱いていた危惧とも重なるであろう。もっとも、彼自身の残した論文中の事例記述を見る限りでは、内的要因と外的要因の両方におのずと目を配っている場合が多く、あまり外的要因の極端な偏重に陥っていたような傾向は伺われない。むしろ、その点はエリクソンの視点をを用いる場合に私たち自身が注意すべき陥穽であると考えられる。

二番目に挙げた共感的なアプローチは、その人がおかれた立場に対する理解という意味では、上記の家庭や環境などの外的要因を重視することともつながっていると思われる。また、本人の主観的体験の重視という意味では、フェダーンらにも通じる現象学的な観点と親和性が高いといえる。

三番目の点については、一見すると、初期における子どもとの関係づくりを重視したアンナ・フロイトの発想とも重なるように見えるが、エリクソンの場合は関係それ自体にも本質的な価値をおいており、このあたりはのちの関係学派に親和性の高い側面であるといえる。

四番目に挙げた、治療構造の厳格さに欠ける点は、エリクソン自身としてはウィーンの世界分析サークルの雰囲気そのままに受け継いだものと感じられていたようであるが、被分析者である子どもや親と食事を共にするなどの点は、(おそらく一定のメリットはあったと考えられるにせよ)、今日の精神分析的な観点からすれば、分析的な作業に制約や限界を生じる側面や、その他の境界侵犯にもなう問題を生じることが懸念されるところである。

彼はサンフランシスコ精神分析研究所時代に、被分析者と気軽に接触しすぎる、自由に転移満足をさせていると批判され、また、セッション頻度が少ないなどの問題から、彼は精神分析家ではなく精神療法家であるとの批判を受けたりもしている (Friedman 1999, 邦訳上巻 p. 150)。これらがやや教条主義的で一面的な批判であったとしても、また批判されている点が必ずしも全面的なデメリットとは限らないとしても、こういった彼のセラピーの枠組みに関する批判には一定の根拠があることも否定できないと思われる。

3.3 エリクソンのアイデンティティ概念の検討

上記のように、エリクソンの心理-社会的観点は、それ以前の環境的側面を無視しがちであった精神分析の全体的傾向に対して補完的な視点を提供したと言える。そして、その心理-社会的観点

の一つに位置付けられるエリクソンのアイデンティティ概念は、青年期の心性を記述するうえで有用な概念であるとともに、アイデンティティ拡散の状態像に焦点を当てることによってその後大きな影響を与えたことは間違いない (cf. Kernberg 2006)。

その一方で、エリクソンによるアイデンティティ概念の説明には、タスクからフェダーンにいたる現象学的な自我の概念化が影を落としており、これが肯定的・否定的の両面においてエリクソンの概念の特徴となっている部分があると考えられる。

以下では、このような点を軸にしなが、エリクソンのアイデンティティ概念の特徴について検討し、とくに精神分析的な理論と臨床思考におけるその有用性を制約してしまうような問題がどこにあるのかを明らかにすることを試みたい。

3.3.1 機能としての自我と意識の対象としての自我の関係

以下の二つの節で述べるエリクソンのアイデンティティ概念の問題点のほとんどは、大まかに言えば、その極端なまでの包括的または包含的性質に由来すると筆者は考えている。この性質は他の面ではメリットでもありうると考えられるが、精神分析的にみた場合にはいくらか問題をはらんでいると言わざるをえない。

その包括的性質が問題を生じている点の一つとして、フェダーンらの発想と同様に、自我の統合性としてのアイデンティティ (機能的自我としての側面) と、体験される自己のまとまりとしてのアイデンティティ (意識の対象としての側面) とが、どちらもアイデンティティ概念のなかに包含されてしまっており (cf. Erikson 1959, 邦訳p. 112)、やや混然一体となったかたちで扱われている点が挙げられる。無意識を措定する精神分析の発想からすれば、機能的自我と意識される自我とが同一であるとは考えられず、無意識領域のない理想形においてしか実現されえないことである。

もちろん、エリクソンはその記述の多くにおいて無意識を措定しており、アイデンティティについてもたとえばアイデンティティ抵抗など無意識領域を含む抵抗を想定している。その意味で、エリクソンの考え全体においては無意識 (その「深さ」は問わないとして) も大いに焦点を当てられてはいる。

しかし、自己認識がさまざまに歪められ、部分的なものにとどまるという精神分析の基本的観点が、アイデンティティ概念そのものには反映されているとは言えない。精神分析的に見れば、その点が欠けていることは無意識領域のない理想形を当然の出発点としていることにもなり、見方によってはそのような楽観的な発想自体が、万能感や自己愛性を許容しているようにすら見える。

ある一面から見れば、そういった万能感や自己愛を許容するような特徴が、私たちにとって彼のアイデンティティ概念を魅力的に感じさせるという側面も否定できないように思われる。ただ、過去においてたとえば教育学の思想の多くが理想主義的で人々に希望を与えるような種類のものであったことを考えれば (彼自身、最初の仕事は教師であり、若い頃に前述のヴォルフの教育思想に触れているほかにもウィーン時代の初期にはモンテッソーリ教育の資格も取得している)、そのような思想に近いものとして捉えることも可能であろうし、決して彼の考えの社会的価値を否定するものではないが、上記のような意味で、アイデンティティ概念自体が精神分析の基本的発想と整合性が取りにくいことは事実であろう。

なお、エリクソン自身、『アイデンティティ：青年と危機』(Erikson 1968) に収録された「私、私の自己、私の自我」という文章のなかでこの問題に触れ、(意識の対象としての) 自己という用語を用いるべきところに自我という言葉を使うべきでないとするハルトマンの意見への同意を表

明している。しかし、そのあとの部分で、こんどは「私」と「(複数の)自己」と「(無意識的)自我」という三つを別のもので述べている。そこでは「(複数の)自己」はごく移ろいやすいものとされ、「私」は確固として一貫性のあるものと捉えられている。そこには、意識の中心としての「私」の体験を追究する現象学的な姿勢が一貫しているとも言え、その方向性に意義を認めることも可能であるが、その一方で、ここでの「私」が、その意味するところであるはずの現実の意識的自我に比べてやや理想化されているように見えるのが気になるところである。

3.3.2 発達的水準の折り重なり

前述のように、タウスクのアイデンティティ概念やフェダーンの自我論が、もっぱら精神病やそれに近い水準での体験を精神的に解明しようとするなかで生まれてきたものであるのに対して、エリクソンはどちらかといえば健康度の高い子どもや青年の治療を志向し (Friedman 1999)、彼の心理-社会的図式もアイデンティティ論も基本的には健康な発達を描く試みとして形成されたものである。

エリクソンのアイデンティティに関する考え方や用語法には若干の揺らぎがあるが、いくつかの箇所では (ex. Erikson 1959, 1968, 1987)、パーソナル・アイデンティティと自我アイデンティティ (または心理-社会的アイデンティティ) とを区別する書き方をしている。

それらの一つにおいて (Erikson 1968)、彼はパーソナル・アイデンティティについてこう書いている。「パーソナル・アイデンティティをもっているという意識的感觉は、二つの同時的な観察にもとづいている。すなわち、時間と空間における自らの存在の自己斉一性と連続性の知覚、そして他者たちが自分の斉一性と連続性を認識しているという事実の知覚である。」(原書p. 50)

そして彼はこれに続けて、「しかし、自我アイデンティティと私が呼んだものは、存在という単なる事実より以上のことに関わっている。それはいわば、この存在の自我的な性質である。したがって自我アイデンティティとは、その主観的側面において、自我の総合する方法すなわち自らの個人性のスタイルに自己斉一性と連続性があり、このスタイルが周囲のコミュニティのなかで自分が重要な他者たちにとってのもつ意味の斉一性や連続性と一致している、という事実への覚知である」(同p. 50) と述べている。

とくに後者の説明は、エリクソンに特徴的とも言える、やや不明瞭で理解しにくい書き方であり、指し示している内容に茫漠とした幅があるために概念間に境界線を引くのが難しくなるような説明であるが、パーソナル・アイデンティティは自分自身をまとまりとして感じられる基本的感覚に関わっているのに対して、自我アイデンティティ (心理-社会的アイデンティティ) は自らの個性の自覚や周囲の社会から認められている感覚に関わっていると言うことができる。

その意味では、パーソナル・アイデンティティの感覚は、基本的な二者関係における分離個体化の相対的な達成において得られる、あるいは抑うつポジションにおいて体験されるような、全体対象関係にもなう全体自己 (whole self) の感覚をさしていると考えられ、これに対して、自我アイデンティティは、さらにエディパルな葛藤を経た先に得られる社会的関係のなかでの genital primacyに関わっていると考えられる。言い換えれば、前者は二者関係の (前エディプス期的な) 問題の相対的克服、後者は三者関係の (エディプス期的な) 問題の相対的克服を意味しているとも言え、精神分析的な意味での発達水準 (人格水準) の異なる次元を指し示していることになる (cf. Kernberg 1976, 邦訳p. 18)。そして当然、理論上は後者が達成されるには前者が達成されていることが必要条件となる。

このように捉える限りでは、これら二つが明確に区別されていて問題の余地などないように見えるが、エリクソンはアイデンティティについて述べる際に、これら二つをあえて区別しない場

合が多く、アイデンティティ概念を用いる際に混乱が生じやすいように思われる。もちろん、アイデンティティの感覚においてこれら二つが本人の覚知のなかで区別されるわけではないため、その区別の必要性は、どちらかといえば精神分析的あるいは臨床的な有用性から要請されるものである。

たとえば、エリクソンの記述では、自我アイデンティティに主眼を置いた理論的記述をしながら、その問題の臨床例示として、明らかにパーソナル・アイデンティティの次元での問題を呈するアイデンティティ混乱の事例が示されていることがある。パーソナル・アイデンティティが障害されていればその先の達成である自我アイデンティティも障害されることになるので、そのような例を用いることはもちろん間違いではないが、臨床的に何が問題なのかという点に関しては混乱を生じやすい書き方であるように思われる。

また、Kernbergらが指摘するように、臨床場面においてアイデンティティの問題を呈して来談するのは、境界水準や顕著な自己愛の障害の場合がほとんどであり、これらはつまりパーソナル・アイデンティティの次元での問題に属している。そのような事例では、たとえ表面的には自我アイデンティティ（心理社会的アイデンティティ）の問題を呈して来談しているように見えても、その背景にはさらに基本的なパーソナル・アイデンティティの問題があると考えられる。

これに対して、自我アイデンティティの次元に固有の問題は、基本的に青年期に固有の問題の反映であると考えられ、健康度の高い人が体験し、自分で乗り越えていく場合が多いと考えられる。ちなみに、エリクソンが1950年代以降において、臨床的記述よりも、社会的変動のなかにある偉大な人物の心理-歴史的な記述に軸足を移したように見えるのも、このような自我アイデンティティの次元に固有の問題への彼の関心を反映しているように思われる。

誤解を避けるために記せば、本節では、エリクソンのアイデンティティ概念が多次元であることが間違っていると言っているのではなく、多次元的なものをやや一緒に扱う傾向があるために、とくに臨床思考においては混乱を生みやすいという点を指摘しているのである。

現代の精神分析的な臨床理論においては、上記の二つのアイデンティティ概念のうち、パーソナル・アイデンティティの次元はKernberg（2006）らによって取り上げられ、その障害がパーソナリティ障害の基本的特徴の一つと位置づけられているのに対して、自我アイデンティティの問題はそれ自体として取り上げられることは稀であり、むしろ自己あるいは社会的自己の問題という形で論じられているように見える。

エリクソンのいう「自我アイデンティティ」に固有の問題は、パーソナリティが比較的よく統合されている次元での問題であることからすれば、獲得や成功をめぐる神経症的葛藤や、自己の承認をめぐる自己愛の問題、あるいは社会的位置づけをめぐる外的・環境的問題などの形をとると考えられる。これに対して、連続性や斉一性といった「アイデンティティ」という用語を必要とする問題は、主として「パーソナル・アイデンティティ」の次元の問題であって、「自我アイデンティティ」に固有の問題においてはこれらが中核的な問題となることは少ないように思われる。

ここに、現代において精神分析的な文脈の中でエリクソンの自我アイデンティティの概念が用いられなくなっている理由の一つがあると考えられる。つまり、自我アイデンティティの次元に固有の問題は、本人のアイデンティティの意識に目配りをしつつも、神経症的葛藤、自己愛の問題、社会のなかでの位置づけの問題などとして個別的に扱うことが精神分析的な臨床においては実りが多いことと、これらのなかでも自己愛の問題への注目がその後は高まってその視点から論じられることが多くなったことにより、これらを自我アイデンティティという用語によって混然と一体化させて扱うメリットは感じられにくくなった側面が考えられる。その一方で、エリクソ

ンがアイデンティティ概念の中核として扱った斉一性や連続性における問題は、自我アイデンティティではなくパーソナル・アイデンティティの次元の問題として、Kernbergらのパーソナリティ障害の中核的特徴の一つに位置づけられるようになっていく。

おそらく、エリクソンが自我アイデンティティの問題を述べるさいに、本来はパーソナル・アイデンティティの次元の特徴である斉一性や連続性をやや過度に強調したことが、彼の概念を分かりづらくしている要因の一つであると考えられる。たしかに、自我アイデンティティが成立してくるためにはそれに先行するパーソナル・アイデンティティの成立が必要であり、そのため自我アイデンティティにも斉一性や連続性が必要となるのは事実であるが、これらは本質的に自我アイデンティティの次元に固有のものとは考えられない。

もちろん、現象としてのアイデンティティの感覚とその混乱、その意義と心理-社会的側面、そしてアイデンティティが原始的な次元から比較的高度な次元までを含んでいることを指摘したエリクソンの慧眼と功績は、今日においても高く評価されるべきものであることに変わりはない。その一方で、上記のような意味で彼のアイデンティティ概念があまりにも包括的であること、「総合的 (synthetic)」ではあっても「統合されている (integrated)」とは言いがたいものであることが、彼の概念が精神分析的な臨床思考において用いられにくくなっている理由の一つであると考えられる。エリクソン以外の論者がアイデンティティという言葉を使うと、決まってアイデンティティの一面だけを述べている形になるという指摘が時折なされるが、これは上記のような極端な包括性からくる当然の帰結であると言える。

彼がアイデンティティ概念のあいまいさを認めつつもこのような包括的な概念化にこだわったのは、一つのまとまった主体として感じられる「私」の感覚（そこではアイデンティティの異なる次元が区別されたりはしない）をとらえようとする彼の現象学的な姿勢の反映でもあったと考えられるが、そのような姿勢は、精神分析的観点の前提である無意識の措定に伴う「主体の疎外」というパラダイムと対極をなすのも事実であろう。ただ、これら対立しあう二つの観点は、必ずしも二者択一的なものにとどまらず、ひとつの弁証法的対立としての意義をもつ可能性も否定できないように思われる。

おわりに

E. H. エリクソンのアイデンティティ概念は、精神分析的理論のなかに明確な位置づけを与えられないまま、精神分析的な文脈では一部を除いて言及されることが少なくなっていると指摘されている (Wallerstein 1998)。本稿では、あいまいとされるエリクソンのアイデンティティ概念の基本的な意味合いについて、とくにこの概念が生まれてきた理論的源流の一つであるタウスクからフェダーンに至る現象学的自我心理学の流れに焦点を当て、それらとの関連という観点から、この概念の問題点と可能性を再検討することを試みた。その結果、これらの流れと共通する『『機能としての自我』と『意識の対象としての自我』との関係』をめぐる問題点と、これらの流れとの不連続に関連した「発達の水準の折り重なり」にともなう混乱を指摘した。

本稿はエリクソンのアイデンティティ概念について、その形成の背景となったと考えられる一部の精神分析理論との関連という視点から検討した。一方で、彼以降に他の精神分析家たちが展開したアイデンティティ論との関係から論じることは本稿ではできなかった。そもそもエリクソンがベーシックなアイデンティティの中核的要素として強調した斉一性や連続性といった特徴は、自我心理学よりはむしろ対象関係論的なスプリッティングの観点から捉えることが臨床的に有用

であり、クライン派やその影響を受けた精神分析家たちが展開しているアイデンティティ論や青年期論から、エリクソンのアイデンティティ概念や青年期論を捉えなおすことが有益であると考えられるが、そのような検討についてはまた別の機会に譲りたい。

参考文献

- Abend S. M. (1974) Problems of identity: Theoretical and clinical applications. *Psychoanalytic Quarterly*, 43(4): 606-37.
- Andreas-Salome, L. (1964) *The Freud Journal*. Basic Books.
- Bonomi, C. (2010) Narcissism as mastered visibility: The evil eye and the attack of the disembodied gaze. *International Forum of Psychoanalysis*, 19: 110-119.
- Brockman, D.D. (2003) *From Late Adolescence to Young Adulthood*. International Universities Press.
- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*. Norton. (仁科弥生訳『幼児期と社会1・2』みすず書房 1977, 1980年)
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 2011年)
- Erikson, E.H. (1968) *Identity: Youth and Crisis*. Norton, Paperback edition. (岩瀬庸理訳『主体性——青年と危機』北望社 1969年)
- Erikson, E.H. (1987) *A Way of Looking at Things: Selected Papers of Erik H. Erikson*. Norton.
- Federn, P. (1926) Some variations in ego feeling. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1927) Narcissism in the structure of the ego. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1929a) On the distinction between healthy and pathological narcissism. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1929b) The ego as subject and object in narcissism. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1943) Psychoanalysis of psychoses. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1953) *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books.
- Freud, S. (1930) Address to the Society of B'nai B'rith. *Standard Edition* XX, 271-274. (石田雄一訳「ブナイ・ブリース協会会員への挨拶」『フロイト全集19』岩波書店 2010年)
- Freud, S. (1930) Civilization and its discontents. *Standard Edition* XXI, 57-146. (嶺・高田訳「文化の中の居心地悪さ」『フロイト全集20』岩波書店 2011年)
- Friedman, L.J. (1998) Erik Erikson's critical themes and voices: The task of synthesis. In: Wallerstein & Goldberg (ed.). *Ideas and Identities: The Life and Work of Erik Erikson*. International Universities Press.
- Friedman L.J. (1999) *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*. Scribner. (やまだようこ・西平直監訳『エリクソンの人生——アイデンティティの探究者 上・下』新曜社 2003年)
- Grinberg, L. & Grinberg, R. (1974a) Pathological aspects of identity in adolescence. *Contemporary Psychoanalysis*, 10: 27-40.
- Grinberg, L. & Grinberg, R. (1974b) The problem of identity and the psychoanalytical process. *International Review of Psycho-Analysis*, 1:499-507.
- Jacobson, E. (1964) *The Self and the Object World*. International Universities Press. (伊藤洸訳『自己と対象世界』岩崎学術出版社 1981年)
- Kernberg, O.F. (2006) Identity: Recent findings and clinical implications. *Psychoanalytic Quarterly*, 75: 969-1003.
- Lunbeck, E. (2014) *The Americanization of Narcissism*. Harvard University Press.
- 小此木啓吾 (1985a) 『現代精神分析の基礎理論』弘文堂
- 小此木啓吾 (1985b) 『精神分析の成り立ちと発展』弘文堂

- Rapaport, D. (1959) A historical survey of psychoanalytic ego psychology. In: Erikson E.H. *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳「精神分析的自我心理学の歴史的展望」『自我同一性——アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 1973年)
- Roazen, P. (1968) *Brother Animal: The Story of Freud and Tausk*. Alfred Knopf Inc. (小此木啓吾訳編『ブラザー・アニマル』誠信書房 1987年)
- Roazen, P. (1969) Victor Tausk's contribution to psychoanalysis. *Psychoanalytic Quarterly*, 38: 349-353.
- Roazen, P. (1975) *Freud and His Followers*. Alfred Knopf Inc. (岸田秀他訳『フロイトと後継者たち 上・下』誠信書房 1988年)
- Rosenfeld, H. (1987) *Impasse and Interpretation*. Tavistock. (神田橋條治監訳『治療の行き詰まりと解釈——精神分析療法における治療的/反治療的要因』誠信書房 2001年)
- Strachey, J. (1961) Editor's introduction to "The ego and the id". In: *Standard Edition* XIX, 3-11. (北山修監訳『フロイト全著作解説』人文書院 2005年)
- Tausk, V. (1919/1933) On the origin of the "influencing machine" in schizophrenia. *Psychoanalytic Quarterly*, 2:519-556.
- Wallerstein, R.S. (1996) The life and work of Erik Erikson. *Psychoanalytic Contemporary Thought*, 19: 164-178.
- Wallerstein, R.S. (1998) Erikson's concept of ego identity reconsidered. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 46(1): 229-47.
- Wallerstein R.S. (2014) Erik Erikson and his problematic identity. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 62(4): 657-75.
- Weiss, E. (1953) Introduction. In: Federn, P. *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Weiss, E. (1966) Paul Federn: The theory of the psychosis. In: Alexander, Eisenstein & Grotjahn (eds.) *Psychoanalytic Pioneers*. Basic Books. 1966.